■日本の外国人コミュニティ■

新宿のタイ人ネットワーク

市野澤潤平
［いちのさわ　じゅんぺい］
■ 東京大学大学院総合文化研究科博士課程

東京都新宿区、なかでも大久保および歌舞伎町周辺は、アジア系外国人の居住者が多いことで知られる。近年、そのなかでもタイをはじめとする東南アジア系の外国人の増加率には目を見張るものがあり、着実に街の成員としての存在感を増しつつある。

現在のところ、大久保や歌舞伎町で活動しているタイ人のほとんどが、経済的な目的のもとにやって来ている。こうした事情の背景に、日本とタイの経済格差を見いだすのは簡単だ。しかし、ゆっくりと街を歩いてみれば、マクロな日タイ関係には回収されない彼らの日々の生活世界が見えてくる。

ＪＲ新宿駅の東口を出て、歌舞伎町を大久保方面へ抜けていくと、東南アジア諸国の文字や色彩をまとった料理店や雑貨店が点在していることに気づくだろう。巨大歓楽街がじわじわと「リトルアジア」化しているのである。じつはこの一帯は、東南アジア系外国人によるエスニック・ビジネスの東京における中心地でもあるのだ。

経済的な成功を求めてやってくるタイ人たちの多くは、徒手空拳だ。そして外国人に厳しい日本では、割の良い働き口を探すのは難しい。そこで、独立独歩の商売人気質にあふれるタイ人たちは、鞄ひとつでできる商売に目を向ける。すでに多くのタイ人が流入している新宿は、それにうってつけの場所なのだ。

タイでは外食業や各種サービス業が発達している。またタイ人たちは、料理やファッションなどにおいて自国のスタイルにこだわる。そうした彼らの文化があればこそ、いかにもタイ的な、美容サービス、食材や雑貨の出張販売といった商売が誕生し、タイ人同士のネットワークの基盤となっているのである。

タイ人たちは日本社会の新参者である。大きな会社や料理店を経営するまでに至った者はいまだに少ない。だから歌舞伎町や大久保を歩くときは、裏通りの道端に目を向けてみてほしい。例えば電信柱に見なれない文字で書かれた張り紙を見かけたら、それはタイからやって来た誰かが明日へと踏み出す、ささやかな第一歩かもしれない。

タイ雑貨・食材店の多くは雑居ビルの一室に居を構える。タイの雑誌・新聞・音楽ＣＤの販売や、テレビ番組を録画したビデオのレンタルのほか、各種イベントの告知など情報センター的機能も果たす、タイ人たちの憩いの場である。この店の入り口には、タイ語で「明けましておめでとう」、「ようこそいらっしゃいました」などの張り紙が並ぶ　撮影：筆者

いちのさわ　じゅんぺい　タイ国立チュラロンコーン大学タイ研究修士、アサンプション大学経営学修士（MBA）。現在、東京大学大学院総合文化研究科博士課程に在籍